

それでは、これから総合教養の試験を始めます。  
メモ用紙を開き、講義を聞いてください。

みなさんは現在、何かペットを飼っていますでしょうか？

2004年、内閣府が行った調査によると、日本で飼育されている犬及び猫の合計数は1810万匹に達し、14歳以下の子供の人口1763万人を上回りました。この傾向は今もなお続き、多くの犬猫が家庭の一員となっています。

経済状況や生活スタイルから、夫婦が子供を設けず代わりに犬や猫を飼うといった生活様式も珍しくはありません。また、近年では単身者がペットを飼うといった新しい生活様式も広まってきています。私たちとペットとの生活がより密接になってきていることは疑いようもない事実です。

そのような背景もあってか、これまでいわゆるペットは「愛玩動物」と呼ばれていましたが、近年では「伴侶動物」あるいは「コンパニオンアニマル」という呼び名が定着してきています。単に可愛がる対象ではなく共に生きる家族であるという考え方が浸透した結果でしょう。

そんな伴侶動物たちですが、獣医業界における医療技術の発展から人間と同じように平均寿命が伸びてきました。中には20年以上生きる犬や猫もいます。また飼い主の意識の向上も長寿化に大きく貢献しています。スーパーのペットフードコーナーを覗けば飼い主たちの意識がうかがえます。ほんの30年前までは家庭の残飯を与えられているペットも珍しくはありませんでしたが、昨今のペットは品種、年齢、持病の有無などに合わせたペットフードを与えられています。飼い主がより一層健康に気を使っていることの証拠と言えるでしょう。

しかし、どれほど寿命が伸びても別れは来ます。通常、多くのペットは飼い主より先に亡くなってしまいます。老衰で安らかに世を去ることができれば幸せですが、中には重い病気に罹患し、長く苦しい闘病生活を経た後に亡くなる動物もいます。

そんな時に1つの選択肢として挙げられるのが安楽死です。

安楽死は積極的安楽死と消極的安楽死にわけられます。

簡単に説明すると、前者は回復する見込みがなく病気による苦痛が大きくかつ患者が望む場合に、医者が致死量の薬物を投与することで安楽死させることです。一方消極的安楽死と言うのは、患者の希望に応じて治療や延命行為を行わないことで結果として死に至らしめることです。

アメリカの一部の州やスイス、オランダなどでは人間に対する積極的安楽死が認められています。しかし日本では人間に対する積極的安楽死を認められていません。

ペットではどうでしょうか。ペットに対する安楽死とは通常積極的安楽死を指します。安

楽死処置を施す際、日本ではペントバルビタールという薬剤が用いられます。これは麻酔薬の一種で、安楽死に伴う苦痛が非常に少ないと言われています。

日本においてペットに対する安楽死処置は医療行為として認められており、なんら違法性はありません。

しかし、それでも安楽死という手段を提示された時、飼い主は大きな葛藤に陥ります。

最後の最後まであきらめきれないという感情が大きな理由でしょう。また自ら愛するペットの死に加担してしまうということに対する罪の意識や良心の呵責も飼い主の決心を鈍らせず。また安楽死させたということに対する周囲の目を気にする場合があります。

このような葛藤はペットに対する愛情が深ければ深いほど大きくなります。これは欧米人であろうが日本人であろうが変わりません。宗教や文化の如何に関わらず、愛する家族に対する安楽死を決めかね、深く葛藤するのは世界共通のことなのです。

しかし一方で、欧米と日本では安楽死に対する意識や許容度の違いも見受けられます。

アメリカやカナダで行われた調査によると、葛藤の末90%の飼い主が安楽死を選んでいきます。安楽死を選択した飼い主はペットの死を受け入れることができたとも報告されています。

その一方で自然死を選んだ飼い主は、愛するペットの死期を先延ばしにすることで余計な苦痛を与えてしまったという罪悪感にさいなまれていたことが明らかになりました。

また、カナダで行われた別の調査結果ではペットを亡くした飼い主の内、84%が安楽死は人道的な手段であると答えていました。

回復する可能性がないのであれば、徒に苦痛を長引かせるよりは終わらない苦痛から解放してあげることこそが飼い主としての思いやりある行動だと言うわけです。

これに対して一般に日本では安楽死に対する否定的な見方が強いと言われています。

安楽死を選択することを躊躇したり、安楽死させた後も自分の選択が正しかったのかどうか悩み続ける人が多くいます。

日本とオーストラリアの大学生の意識調査にこうした傾向が顕著に表れています。2007年、2008年に行われた調査では、「獣医師から不治のケガや病気にかかっているペットの安楽死を提案された場合、飼い主はそれに従ったほうが良い」という設問に対して、

日本人大学生は「そう思う」15.7%、「どちらかというと思う」31.6%、「どちらかというと思わない」39.5%、「そう思わない」13.2%と言う結果でした。全体の70%以上が「どちらかと言えばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」に集中し、安楽死に対する意見が固まっていないのがわかります。

これに対してオーストラリアの大学生は「そう思う」47.8%、「どちらかというと思う」40.2%、「どちらかというと思わない」9.4%、「そう思わない」2.7%と回答していました。「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計が88%に達し、より安楽死を許容する傾向が示されています。

また安楽死を忌避する傾向は飼い主だけにとどまりません。日本では獣医師も欧米に比べ

ると安楽死と言う選択により否定的です。

安楽死と言う行為に精神的苦痛を大きく受ける獣医師が多いことも確かですし、本人の信条において安楽死を引き受けない獣医師もいます。

以上のように日本では安楽死という選択を選びきれない傾向があります。

これは日本と欧米の文化的、宗教的な差異から生じるとも言われています。

欧米ではキリスト教的価値観から人間は動物を管理するという意識が強いと言えます。聖書において、人間は神の形を模して造られた存在であり、またアダムは動物達を管理する役割が与えられていました。ダーウィンの進化論が始めは受け入れられなかったのも、こうした人間は特別であり、動物とは全くの別物という宗教観が原因でした。

一方日本では仏教における輪廻転生という考え方に代表されるように人間と動物をまったく別のものと区別しない考え方が浸透していました。人間と動物を連続的なものとして受け入れていたのです。

このように、動物に対する管理意識の強い欧米では動物の命に積極的に介入する安楽死が受け入れられると言われていています。一方で、そういった人間を特別視しない日本では動物の生死に人間が介入することに抵抗を感じると言われています。

しかし、ペットは自ら安楽死を選択することはできません。どれほどペットの意志を尊重したいと思っても、最終的には飼い主が判断を下す他ないのです。

ここで、末期の癌を罹患している犬を想定しましょう。癌が全身に転移し、大きな苦痛に蝕まれています。外科的手術による摘出は不可能で、副作用の強い抗がん剤による内科的治療を受けていますが、回復は見込めていません。

こういったケースは決して稀なケースではありません。前述のように獣医療が発達してペットたちの寿命も伸びました。またワクチンの接種で防げる病気も増えました。その結果相対的にガンで死亡するケースが増え、現在では犬・猫どちらにおいてもガンが死因の第一位となっています。飼い犬の約55%、飼い猫の約40%がガンで命を落としているのです。

このような、もはや回復が期待できないケースでは見込のない治療を続けたとしても苦痛を長引かせるのみです。そんな場合、安楽死が一種の救いと言っても過言ではないでしょう。

もちろん、他に治療の手段がないことを十分に確認した上においてですが、苦痛を取り除いてあげるために安楽死と言う手段を選ぶことも考慮に入れることがペットへの思いやりと言えるでしょう。

反対に安楽死と言う手段がもたらす負の側面も触れないわけにはいきません。

2013年に行われた調査によると、アメリカでの犬の死因の第一位は安楽死であり、安楽死の原因の第一位は問題行動であることが明らかになりました。

問題行動とはすなわち、無駄吠え、噛み癖、トイレを覚えないなどです。これらはたいていの場合、適切な躾を行うことで回避できるものです。

また経済状況の逼迫や引っ越しを理由に安楽死を求める飼い主もいます。

動物を飼う際に、自らの生活スタイルや経済状況など諸々の条件を検討することなく安易に飼い始めてしまうことがこういった社会問題の何よりの原因です。ペットは可愛いだけの存在ではなく、意志を持った一つの命です。可愛い、癒されるなどの良い側面ばかりではなく、費用が掛かることや世話を見なければいけないことをしっかりと認識することが必要です。

安楽死は動物を安楽させるための手段です。飼い主が安楽になるための手段として用いられることは本来許されざる行為です。

以上、安楽死の正負の両側面に触れましたが、安楽死と言うのはあくまで手段の1つでありありません。それ自体が善であるとか悪であるとか言った極論は意味を持ちません。

必要なことはメリットとデメリットを理解し、状況に応じた適切な選択をすることです。

安楽死という言葉聞いたときに反射的に拒絶、あるいは無条件に受け入れるのではなく選択肢の1つとして冷静に判断することが大切なのです。

近年、獣医療においても終末期医療、ターミナルケアという考え方が広まってきました。これは治療の見込みのない動物たちに対して苦痛を伴う治療や延命行為を行わず、自宅などで最後の時間を安らかに過ごしQOL、すなわち生活の質を高めようというものです。人間の場合と同じように、最期まで辛い入院生活を続けるのではなく、残りの短い時間をできるだけ家族のもとで過ごす方が幸せであるという考えのもとで行われます。これは消極的安楽死の一種であると言えるでしょう。

愛するペットが重い病気に陥った時、徹底して闘病を続けるのか、安楽死を選ぶのか、最期の時間を共に過ごすのか、選ぶのはペット自身でもなく、獣医でもありません。選択できるのは飼い主しかいません。

それゆえに飼い主は安楽死と言う手段から目をそらさず考えなくてははいけません。安楽死と言う手段を選択するにしろ選択しないにしろ、責任をもって判断しなくてはならないのです。